原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第12集

興触遺跡（こうふれ）・興触川上遺跡（こうふれかわかみ）

一般県道郷ノ浦芦辺線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第12集

興触遺跡・興触川上遺跡

一般県道郷ノ浦芦辺線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発刊にあたって

本書は，一般県道郷ノ浦芦辺線改良工事に伴って実施した平成７年度と平成10年度の興触(こうふれ)遺跡と，平成10年度の興触川上(こうふれかわかみ)遺跡の発掘調査報告書です。

興触遺跡・興触川上遺跡は，地名の呼称が国府（こう）に通じることや，印鑰社（いんやくしゃ）とされる興神社があることなどから，律令時代に置かれた壱岐国府の有力な推定地とされており，これまでの調査でも，律令時代から中世にかけての溝や土壙，柱穴などの遺構や国産はもとより中国や朝鮮半島の遺物が確認され，この地に何らかの拠点または有力者が存在したことが想定されています。

今回の発掘調査では，直接国府に結びつくような遺構は発見されませんでしたが，中国産の白磁や各種青磁，国産の緑釉陶器などの出土品が出土し，中世においてこの両遺跡に壱岐国の役所などの施設が存在したことが考えられます。

今回の発掘調査の成果を学術的な資料として，また文化材の保護のため役立てていただければ幸いです。

平成11年３月31日

長崎県教育委員会教育長　出　口　啓二郎

例　　言

1．本書は，一般県道郷ノ浦芦辺線改良工事に伴って実施した，平成７年度と平成10年度の興触遺跡，平成10年度の興触川上遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査地区の所在は，長崎県壱岐郡芦辺町湯岳興触字田口335外である。

3．調査は長崎県教育委員会を主体として，以下の担当者により実施した。

平成７年度興触遺跡調査

長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

文化財保護主事　　川口　洋平（現県文化課文化財保護主事）

芦辺町教育委員会

文化財指導員　　松永　泰彦（平成10年12月６日逝去）

平成10年度興触遺跡調査

長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

係長（副参事）　　宮﨑　貴夫

文化財保護主事　　杉原　敦史

平成10年度興触川上遺跡調査

長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

文化財保護主事　　村川　逸朗

4．本書で使用した遺物の実測および遺物と遺構の製図は，原の辻遺跡調査事務所がおこなった。

5．本書に収録した遺物・図面・写真は，原の辻遺跡調査事務所で保管している。

6．本書の写真は，川口洋平，宮﨑貴夫，村川逸朗が撮影した。

7．本書の執筆はIII．１．を川口洋平が，III．３．を村川逸朗が，それ以外を杉原敦史が担当した。

8．本書の編集は杉原敦史による。

本 文 目 次

Ⅰ．遺跡の立地と環境……1
1．地理的環境……1
2．歴史的環境……2

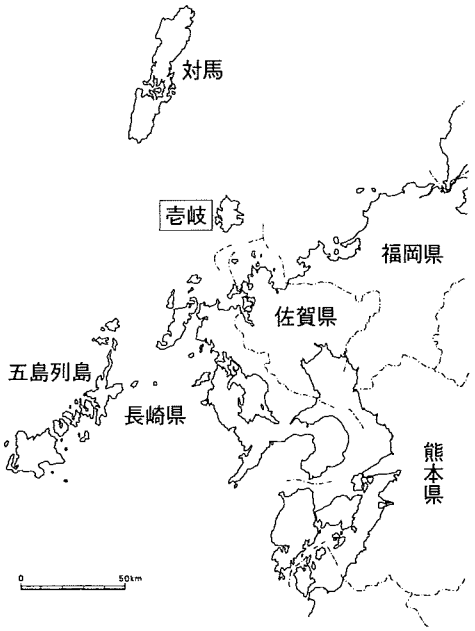
Ⅱ．調 査 経 緯……3
Ⅲ．調　　査……5
1．平成７年度興触遺跡調査……5
(1) 調査概要……5
(2) 遺　　構……5
(3) 遺　　物……5
(4) ま と め……6
2．平成10年度興触遺跡調査……11
(1) 調査概要……11
(2) 遺　　構……11
(3) 遺　　物……11
(4) ま と め……11
3．平成10年度興触川上遺跡調査……21
(1) 調査概要……21
(2) 遺　　構……21
(3) 遺　　物……21
(4) ま と め……25

Ⅰ．遺跡の立地と歴史的環境

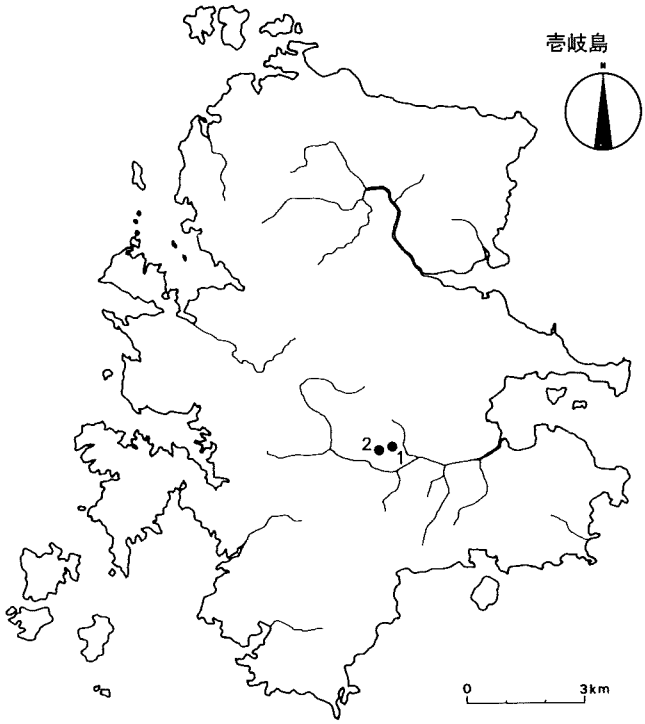
１．地理的環境

壱岐島は，九州島と朝鮮半島の間に広がる玄界灘に位置する東西約15km，南北約17km，面積約139㎢の島である。全体的に平坦な地形で，島の最高峰である岳の辻でさえも213mにすぎず，対馬の峻険な地形と対照的である。島の基盤は第三紀の堆積岩で，その上を玄武岩が覆っている。

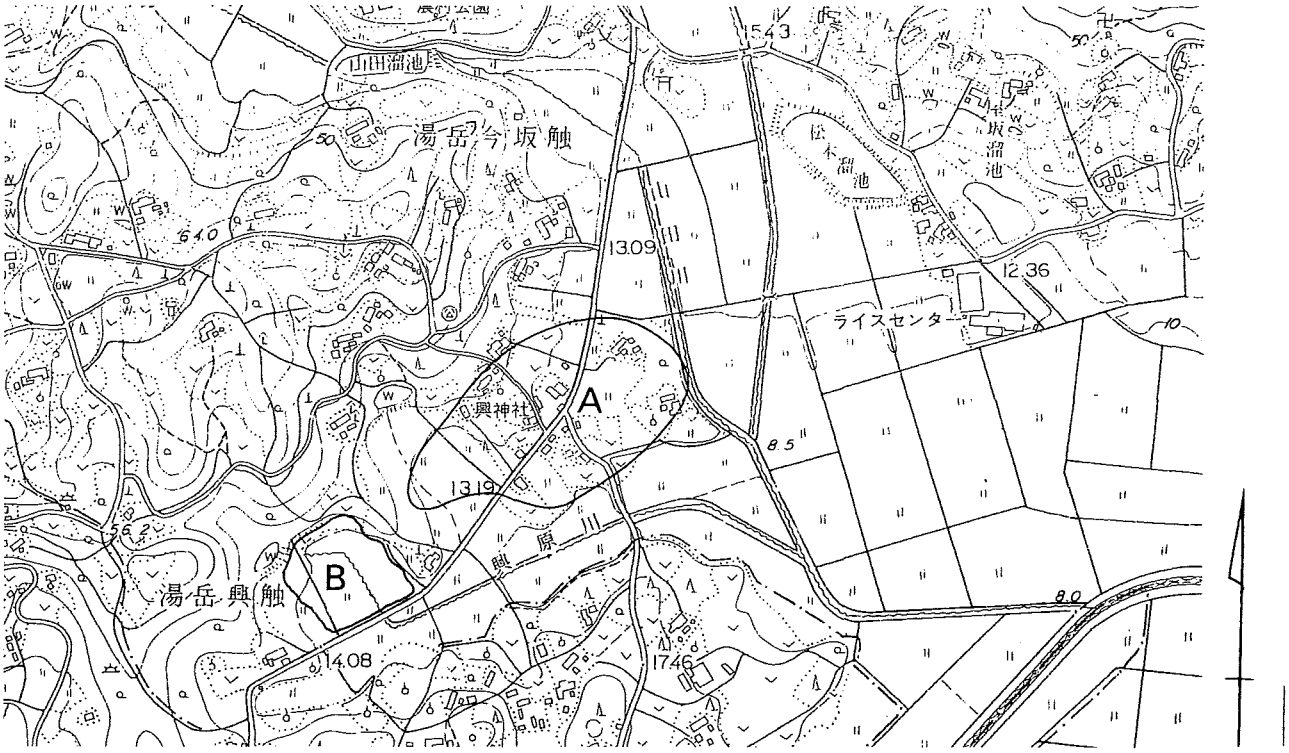
島の南東部には，島内最大の平野，長崎県でも第２位の広さを誇る深江田原があり，肥沃な穀倉地帯として知られている。興触遺跡と興触川上遺跡は，この深江田原の北西部の外縁に位置し，北側の山から平野に突き出た舌状台地とその周辺に拡がっている。舌状台地は，幾条もの谷が入り込む複雑な地形をなしている。遺跡の標高は８～18mで，現在は水田や畑地として利用されている。



第１図　壱岐島位置図



第２図　遺跡位置図
（※１＝興触遺跡
２＝興触川上遺跡）



第3図　遺跡周辺図（1／10,000）
（※A＝興触遺跡範囲，B＝興触川上遺跡範囲）

2．歴史的環境

壱岐島はその地理的環境を要因として，日本本土と大陸との中継地として特異な発展をとげた島である。古くは3世紀の中国の歴史書，所謂『魏志倭人伝』の中に「一支国」として記され，弥生時代のクニとして成立していたことがわかっている。最近では，当該遺跡と同じく深江田原にある原の辻遺跡が島内最大の環濠集落であることが確認され，「一支国」の中心集落＝王都として確定されるに至っている。

古墳時代から古代にかけても，大陸との関係から壱岐島は中央政権から重要視され，特に後期古墳には，中央との密接な結びつきを示す規模・内容を誇るものが少なくない。律令時代には，「壱岐国」が設置され国府や島分寺も置かれた。古代末から中世前期にかけては，たびたび外敵の侵入を受け，混乱したものと思われる。中世後期は，南北朝の動乱をはじめとする国内情勢の変化に応じて，様々な勢力が島内に入り込み，割拠する時代であった。中世の壱岐に関しては，一級資料となる文献が存在せず，その実情については未だ不明な点が多いのが現状である。

II．調査経緯

前述したが律令時代，壱岐にも国府が置かれた。しかし，国府の置かれた場所については特定されていない。歴史地理学的にはいくつかの推定地が唱えられている。その根拠となるものが，平安時代に成立した『延喜式』(1)と『和名抄』(2)である。『延喜式』は，壱岐国は下国で壱岐と石田の二郡からなり，優通という駅名を記す。また，『和名抄』は，この二郡の郷を記し，国府は石田郡にあるとしている。当該遺跡周辺は，地名が国府（こう）に通じることや，印鑰社とされる興神社があることなどから国府推定地の１つとされている(3)。しかし，この付近が古代に石田郡であったのか，壱岐郡であったのかについてもはっきりしない。当該遺跡は芦辺町に所在するが，隣接した石田町側には興原遺跡があり，近世においては郡境であった。どちらにしても，考古学的実証がなされてはおらず，推定地の域を脱するものではない。

平成７年度，一般県道郷ノ浦芦辺線改良工事に伴い，長崎県教育委員会を主体として，原の辻遺跡調査事務所と芦辺町教育委員会が担当し，平成７年８月29日～９月11日に50㎡の調査を実施した。更に工事の進展に対応して，平成10年度に長崎県教育委員会が主体となり，原の辻遺跡調査事務所が担当して，平成10年７月６日～７月31日に519㎡の調査を行なった。また，興触遺跡の西部に隣接する地区において，圃場整備工事中に平安時代や中世の遺物が出土し，平成10年９月新たに興触川上遺跡として登録されたため，平成10年10月13日～10月21日に長崎県教育委員会を主体に，原の辻遺跡調査事務所が担当して県道工事区域 202㎡の調査を実施した。

註 (1) 延長５（927）年成立
(2) 承平５（935）年成立
(3) 山口麻太郎，木下良，日野尚史など

第4図　文久年間（1861～4年）の興神社周辺（『壱岐名勝図誌』より）

Ⅲ. 調　　査

1．平成７年度興触遺跡調査

(1)　調査概要

①調査方法（第１図）

調査は，平成７年８月29日から９月11日にかけて，県道拡幅工事予定区域に２ｍ×５ｍの試掘壙を５箇所設定して行なった。調査面積は50㎡である。

②土層（第２図）

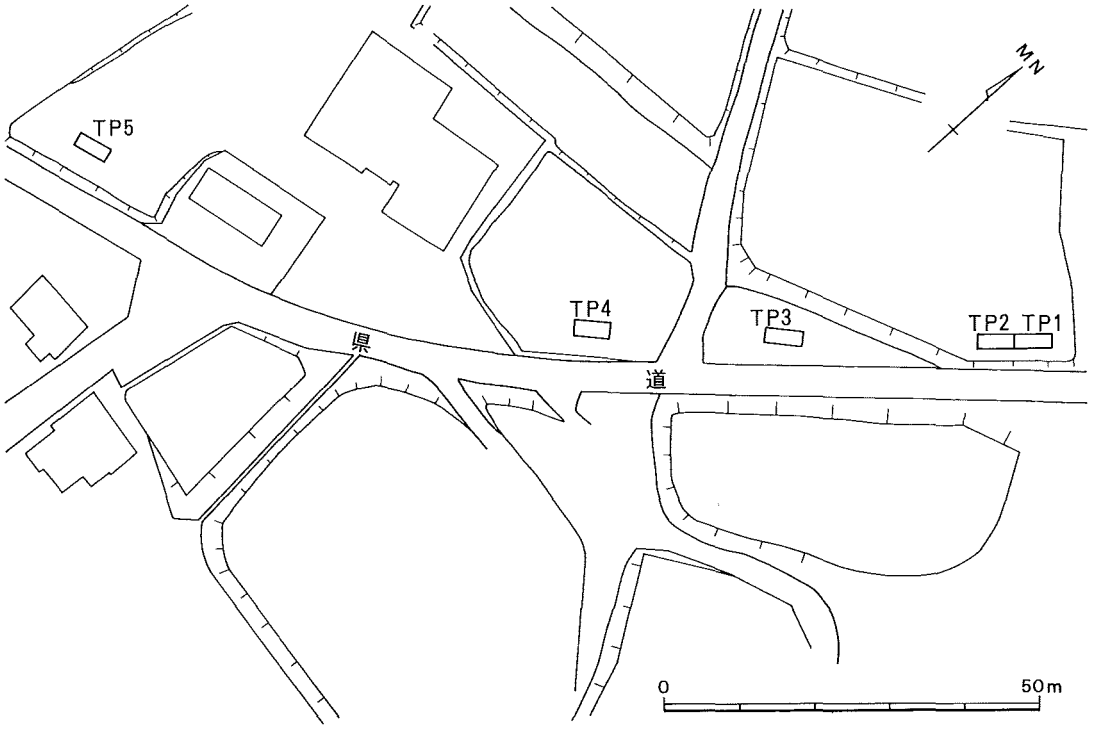
ＴＰ１とＴＰ２では，耕作土の第１層に古代の須恵器や中世の輸入陶磁器が近現代の遺物と共に含まれていた。第２層と第３層は客土で，第４層は基盤層である。ＴＰ２とＴＰ３は，第１層から第３層まで撹乱されていた。ＴＰ５は山林の中に設定したが，腐葉土の下は自然堆積で遺物は全く含まれていなかった。

(2)　遺　　構

遺構は確認されなかった。

(3)　遺　　物（第３図）

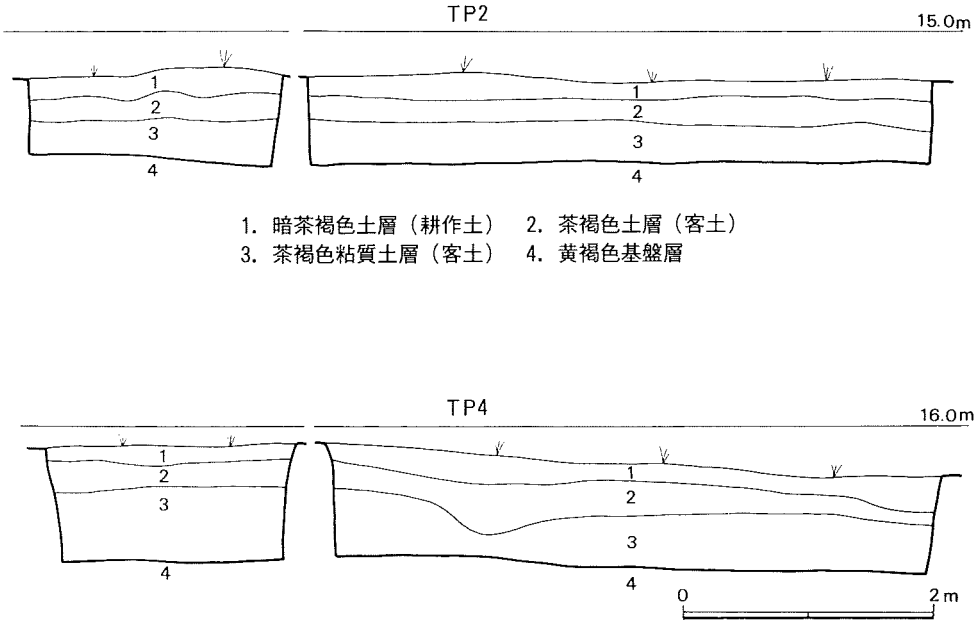
ＴＰ１とＴＰ２の第１層には，近現代の物に混じって古代の須恵器と土師器の小片や，中世に中国から輸入された青磁や白磁の小片などが含まれていた。



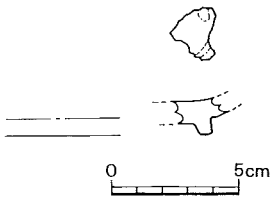
第１図　試掘壙位置図（１／1000）

(4) ま と め

今回の調査では遺構や遺物包含層は確認されなかった。ＴＰ１・２で出土した遺物は削平などによって流れ込み，撹乱されたものと考えられる。北側の台地には遺構などが残存している可能性もある。



第２図　ＴＰ２・ＴＰ３土層図（１／60）

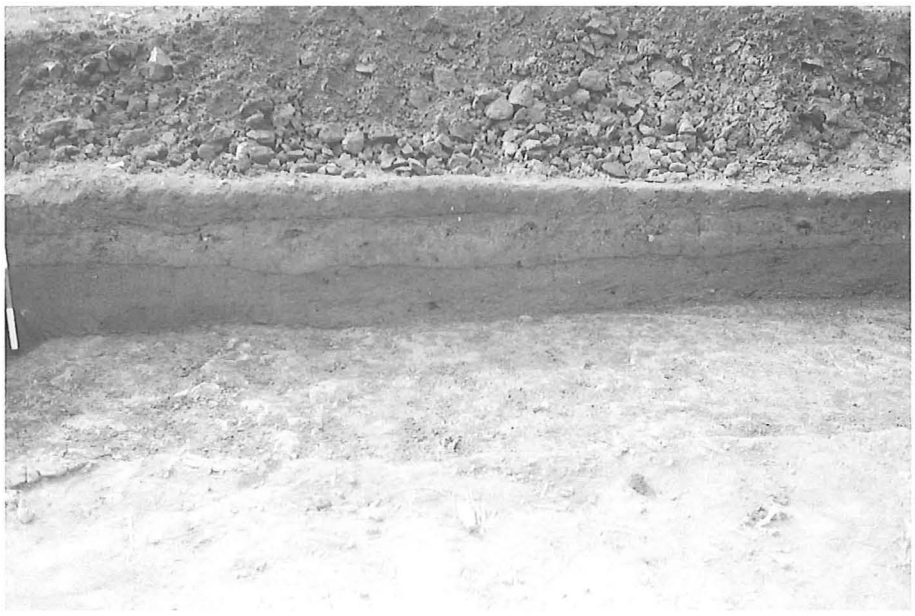


第３図　ＴＰ１・１層出土越州窯系青磁実測図（１／３）

図　　版

調査区遠景（南より）

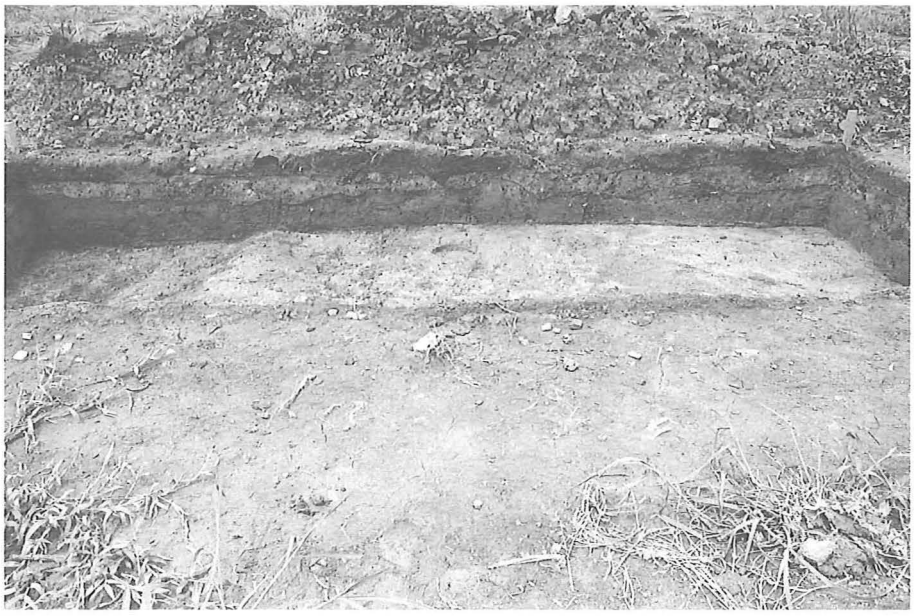
ＴＰ１・２完掘状況



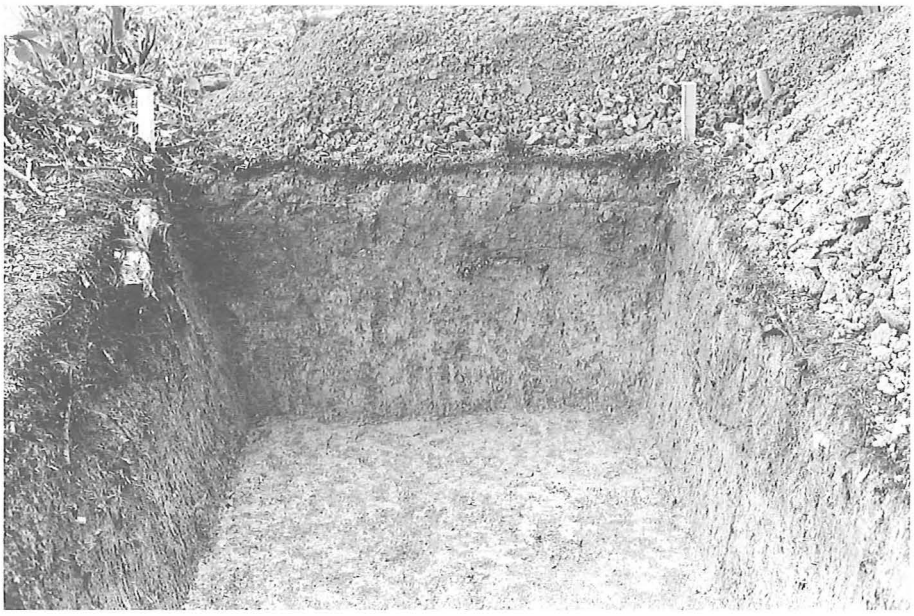
ＴＰ２北壁土層

図版 2

ＴＰ３調査風景



ＴＰ４北壁土層



ＴＰ５西壁土層

2．平成10年度興触遺跡調査

(1) 調査概要

①調査方法（第１図）

調査は，県道改良工事予定区域に東からＡ区（321㎡），Ｉ区（４ｍ×14m），II区（５ｍ×13m），III区（41㎡），IV区（２ｍ×18m）の５箇所の調査区を設定し，平成10年７月６日から同年７月31日までの期間に519㎡の調査を実施した。

②土層

遺物の包含層は確認できなかった。Ａ区・Ｉ区・II区・III区ともに，近現代における削平と撹乱を全面的に受けていた。IV区では，昭和30年代の圃場整備に伴う埋土層を確認した。

(2) 遺　構

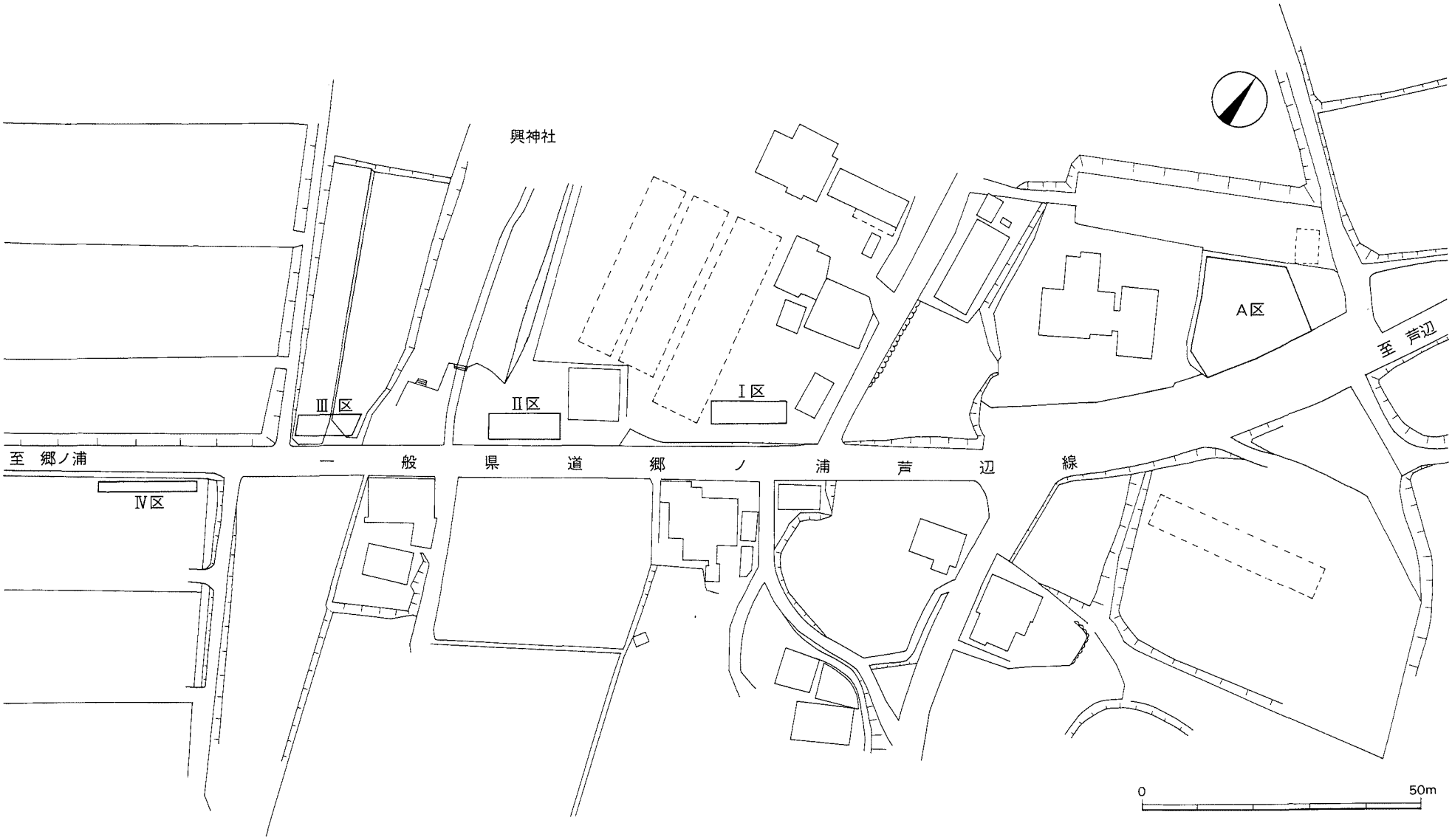
数個のピットを確認したが年代は確定できず，確かな遺構は確認できなかった。

(3) 遺　物

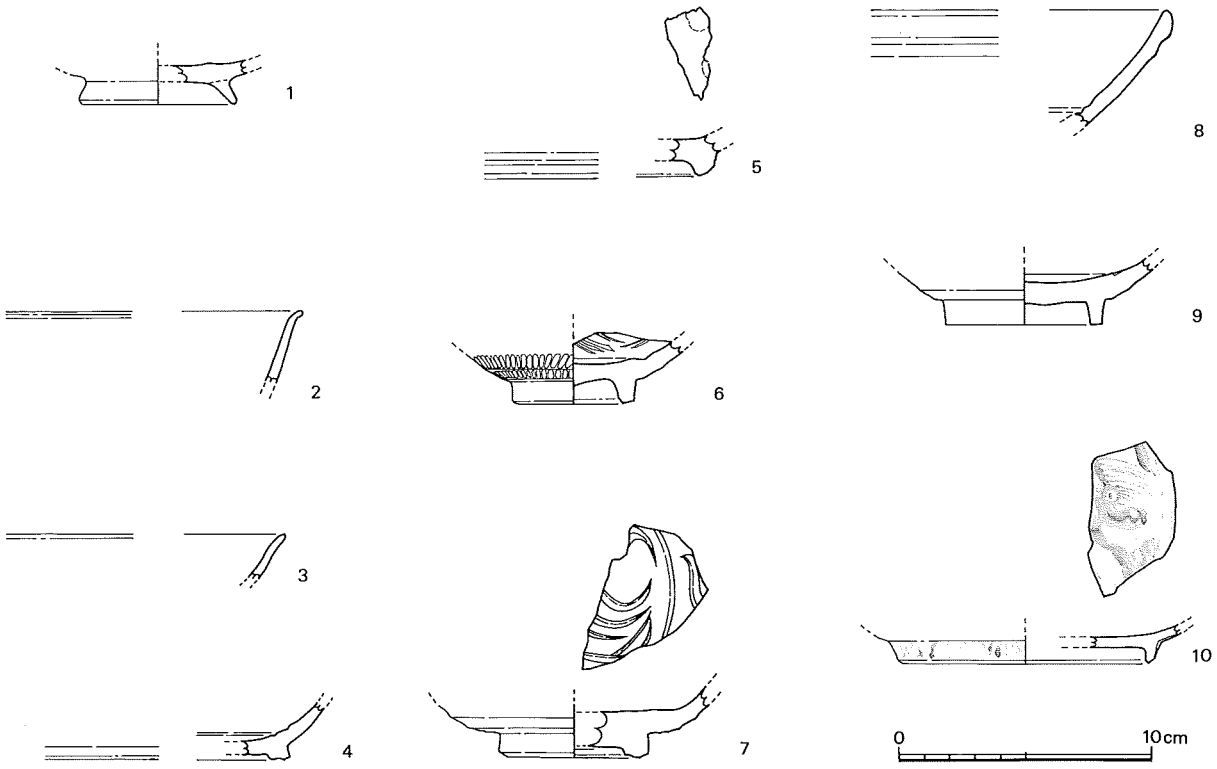
コンテナ８個分の遺物が出土した。大多数の近現代の遺物に混じって，古代の須恵器と土師器や緑釉陶器，中国から輸入された越州窯系青磁をはじめとする古代・中世の陶磁器の小片も出土した。ここでは，図化できるものから12点を掲載した。

①土器（第２図）

１は高台付き土師器の底部である。IV区３層から出土した。胎土は橙色でわずかに金雲母を含む。高台は付け高台である。２は緑釉陶器の口縁部である。Ｉ区から出土した。胎土はやや暗い灰白色で，浅黄色の釉が薄くわずかに残る。体部内外面に回転ナデを施す。３も同じく緑釉陶器の口縁部である。Ａ区１層から出土した。にぶい黄色の胎土で，ほとんど剝げているがわずかに浅黄色の釉が残る。４は緑釉陶器の底部である。Ｉ区の２層から出土した。灰色の胎土に濃緑色の釉がかかる。畳付から高台内面にかけて釉の痕跡が見られる。５は越州窯系青磁の底部である。II区１層から出土した。胎土はにぶい黄橙色で，やや緑がかったにぶい黄色の釉が残る。畳付は釉をふきとり，見込みに目跡を残す。６は同安窯系青磁の底部である。Ｉ区２層から出土した。灰白色の胎土に，緑がかった灰白色の釉がかかる。体部下端には２段にわたって放射状に削り痕が残る。内面にはヘラによる片彫りと櫛による文様を有する。７は龍泉窯系青磁の底部である。III区１層から出土した。胎土は灰黄色で，体部から高台の外面にかけてやや暗い浅黄色の釉がかかる。体内面・見込みにヘラ片彫りによる蓮華文が入る。山本分類のＩ－２ｂ類である。８は森田・横田分類の白磁碗IV類の口縁部である。玉縁の口縁で，胎土は灰白色で黒い細粒が混じり，灰白色の釉をかける。III区２層から出土した。９は森田・横田分類の白磁碗IV類の底部である。灰白色の胎土に，やや黄色がかった灰白色の釉を施し，貫入が見られる。体下部から高台にかけて回転ヘラ削りを行なう。IV区２層から出土した。10は明青花の皿の破片である。III区２層から出土した。内面に玉取獅子の図柄を描き，高台の外面にも染付を施し，畳付は釉を剝ぎ取る。小野分類の染付皿Ｂ群である。



第１図　調査区配置図（１／1000）



第2図　出土土器実測図（1／3）

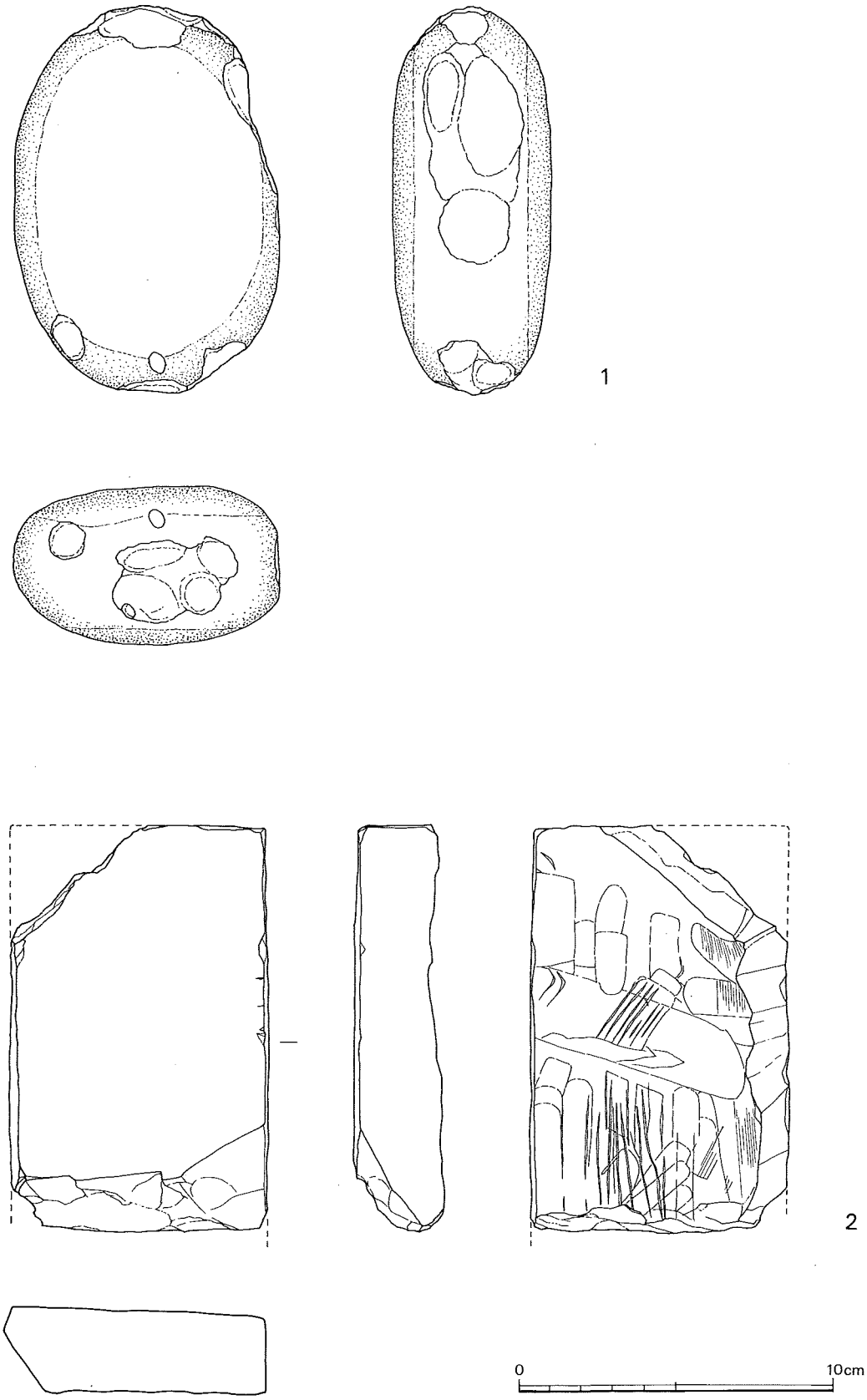
②石器（第3図）

1は敲石である。硬質の玄武岩で，825ｇを測る。端部と側辺部に使用痕が見られる。2は砥石である。粘板岩を素材とし，510ｇを測る。素材の密度から仕上げ用と考えられる。裏面には形状の調整を行なった鑿跡が多く残っている。また端部にも調整跡があり，本来もっと長さがあったものが折れ，その後も折れた部分を調整して使用したものと思われる。

(4)　ま と め

今回の調査では，遺構や遺物包含層は確認できなかった。出土した古代・中世の遺物は，削平などによる流れ込みや撹乱を受けていると考えられる。設定した調査区は，県道隣接地という利便性などを背景として，甚だしい削平・撹乱を受けていた。しかし，緑釉陶器や越州窯系青磁の出土は，この遺跡における国衙等の特別な施設の存在を暗示する資料である。県道から離れた北側の台地等には関連する遺構などが残存している可能性がある。

興触遺跡の発掘調査に尽力されてきた，芦辺町教育委員会文化財指導員の松永泰彦氏が去る平成10年12月6日急逝された。末尾ながらここに謹んで哀悼の意を表する。



第3図　出土土器実測図（1／2）

図　　版

調査区遠景（東から）

調査区遠景（南から）

A区調査風景

図版 2

A区完掘状況(北から)

I区完掘状況(東から)

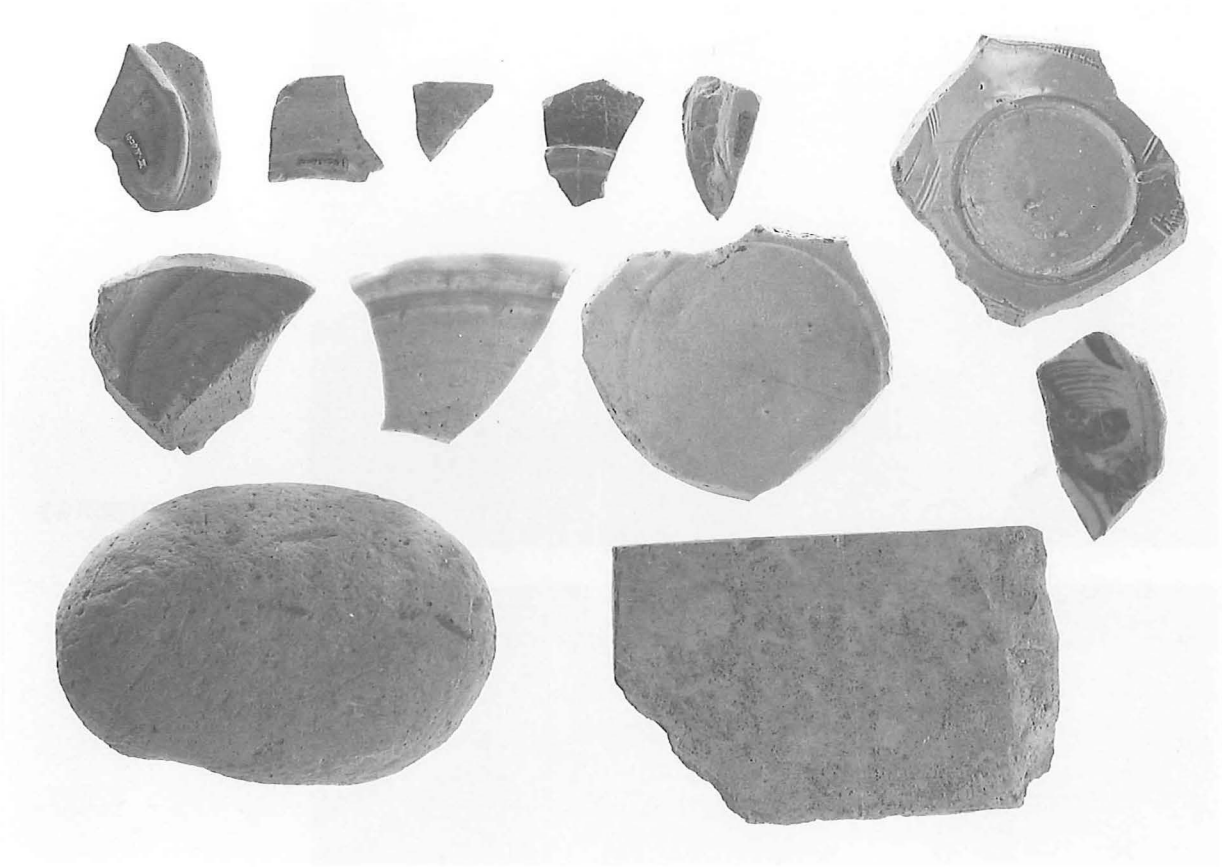
II区調査風景

II区完掘状況(西から)

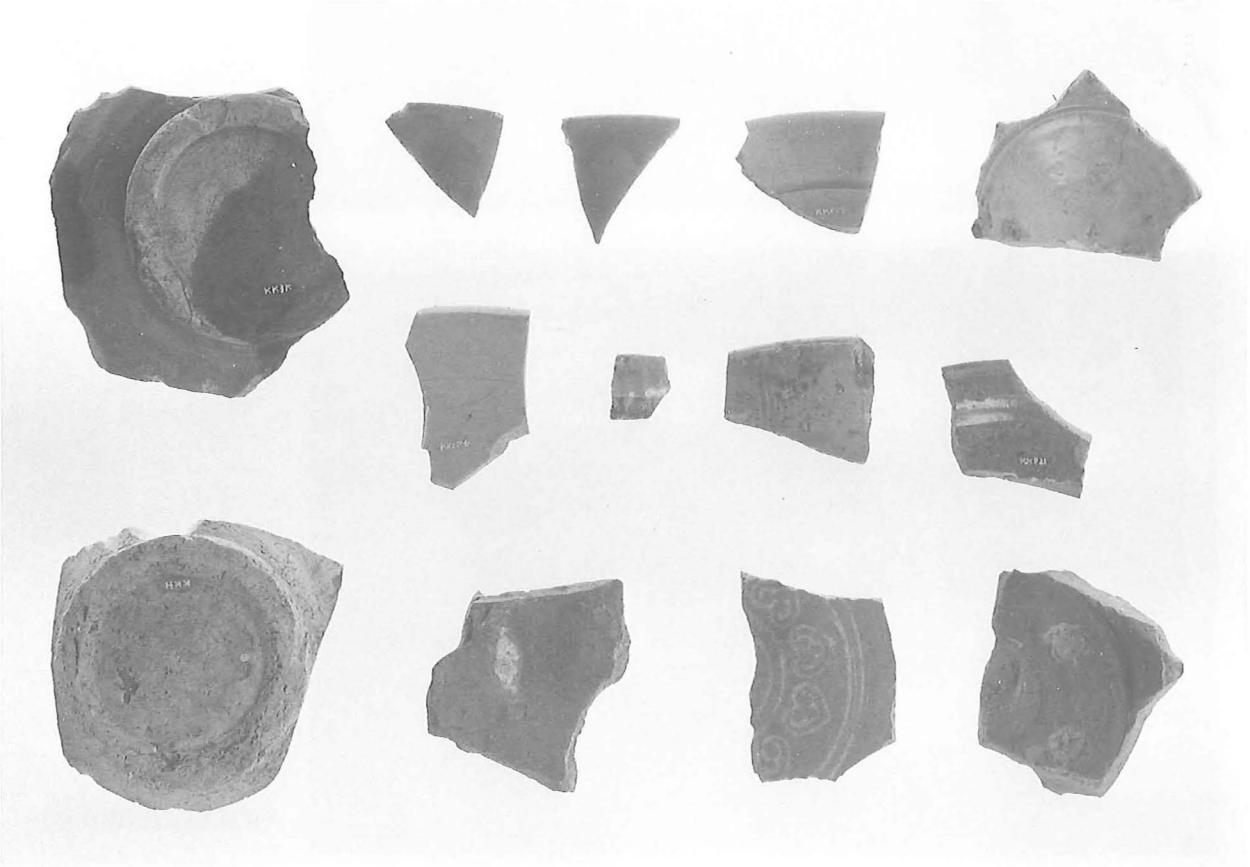
III区完掘状況(西から)

IV区完掘状況(西から)

図版 4



平成10年度　興触遺跡調査出土遺物



平成10年度　興触川上遺跡出土遺物

3．興触川上遺跡の調査

(1) 調査概要

①調査経緯と方法

興触川上遺跡調査の端緒は，芦辺町教育委員会により中世期の遺物が発見され，新規発見の遺跡として登録されたことと，この遺跡内で県道郷ノ浦芦辺線の拡幅工事が行われるようになったことによる。関係する所在地の地番は，長崎県壱岐郡芦辺町湯岳興触字川上733—1，775—1になる。

調査は，工事予定区域に東からⅠ区（186㎡），Ⅱ区（0.6m×9.5m），Ⅲ区（0.8m×13m）の3箇所の調査区を設定して行った。調査面積202㎡で，調査期間は，平成10年10月13日～同年10月21日で長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所が実施した。

②土　　層

Ⅰ区では，1層として暗褐色土層の堆積があり，これは中世期を主体とする包含層である。その下に部分的に2層，明褐色混土層があり，その下層は3層の灰褐色粘質土層，4層，灰色粘質土層，5層，暗灰色粘質土層のいずれもグライ化した粘質土壌の堆積が認められる。その下の6層からは暗灰色混礫層が認められた。

2，3区では，表土層の下に厚さ60～70cmの暗茶色土層があり，その下に灰色粘質土層がある。

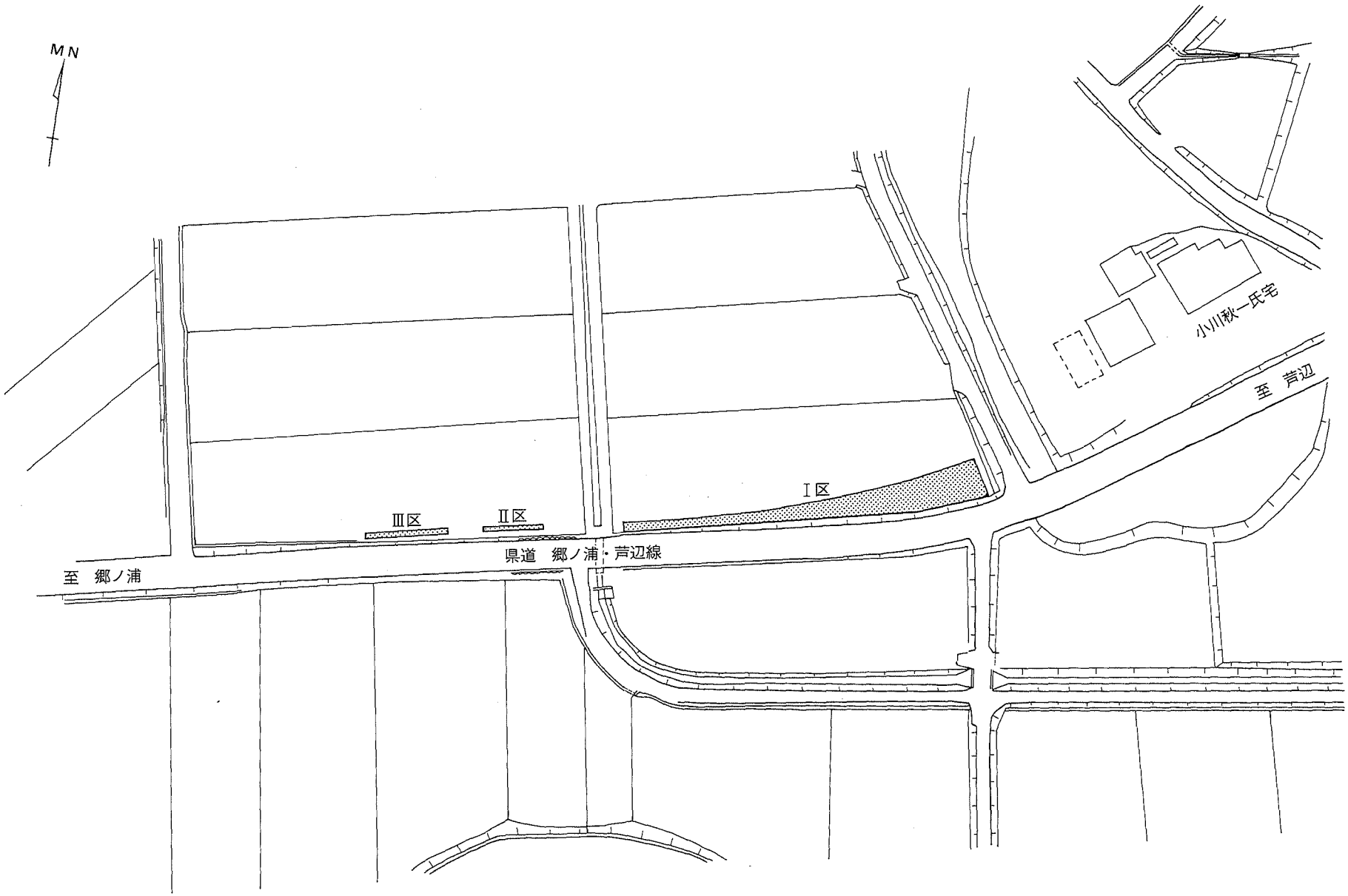
(2) 遺　　構

Ⅰ区において，後述するような遺物の集中が2箇所で確認されたものの，柱穴等の遺構はⅠ～Ⅲ区においては確認されなかった。

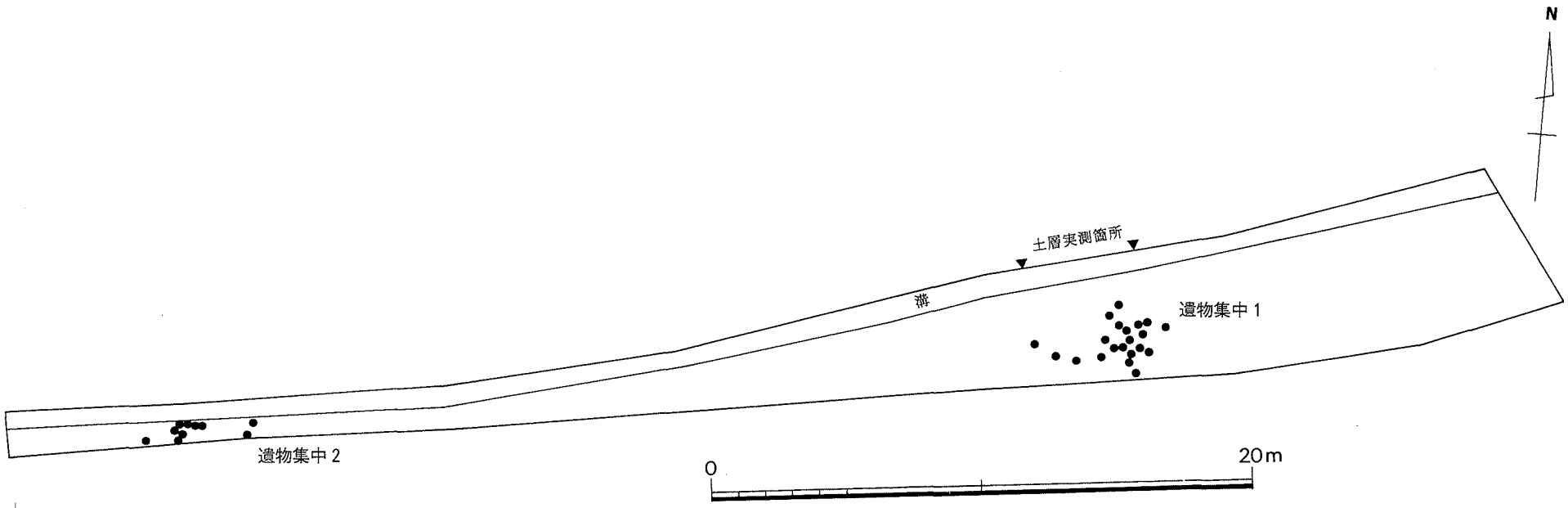
(3) 遺　　物

今回の調査で表土層を含めて200点程の遺物が出土した。その内，包含層から出土位置を記録して取り上げたのは，48点であった。包含層内出土遺物の内容としては，古代の須恵器や土師器，中国から輸入された中世の龍泉窯系青磁等をはじめとする中世の陶磁器等の破片，滑石の石鍋片等が出土した。以下に13点を図示して，観察結果と，型式分類が可能なものはその類型を呈示することとする。

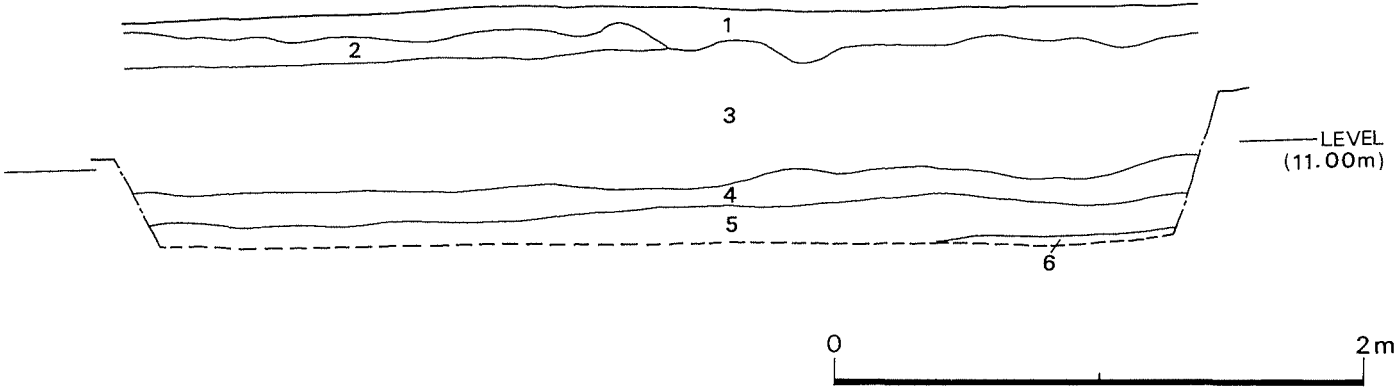
1は，淡緑黄色を呈する青磁の底部片である。高台が断面四角で底部の器肉が厚い，畳付およびその内側は露胎である。底部片のみの特徴では，横田・森田氏編年（横田・森田1978，以下の分類はこの文献からの引用である）の中国産龍泉窯系青磁Ⅰ類の特徴を有している。Ⅲ区表土層出土。2，3は，中国産龍泉窯系青磁Ⅰ—5類の特徴を有するもので，2，3ともにⅠ区遺物集中1からの出土である。4は，白磁の皿であるが体部上半部で外反し端部は特に丸くすることもなくそのまま収めている。釉は黄色味ぎみの白色で，内面の屈曲部には沈線状の段を有する。白磁Ⅳないし Ⅴ類の範疇におさまるものと考えられる。Ⅰ区遺物集中1からの出土である。5も白磁の皿である。底部径43㎜，体部下半および底部は露胎，見込みが丸くくぼみ段を有している。Ⅱ類の特徴を示している。遺跡内の表採品である。6は，白磁の底部片で体部から底部にかけては露胎で，高台は厚く削り出しが浅い，内面には沈線状の段を有することからⅣ—1・a類の特徴をもっている。同じく表採品である。7は，



第１図　興触川上遺跡調査区配置図（１／1000）

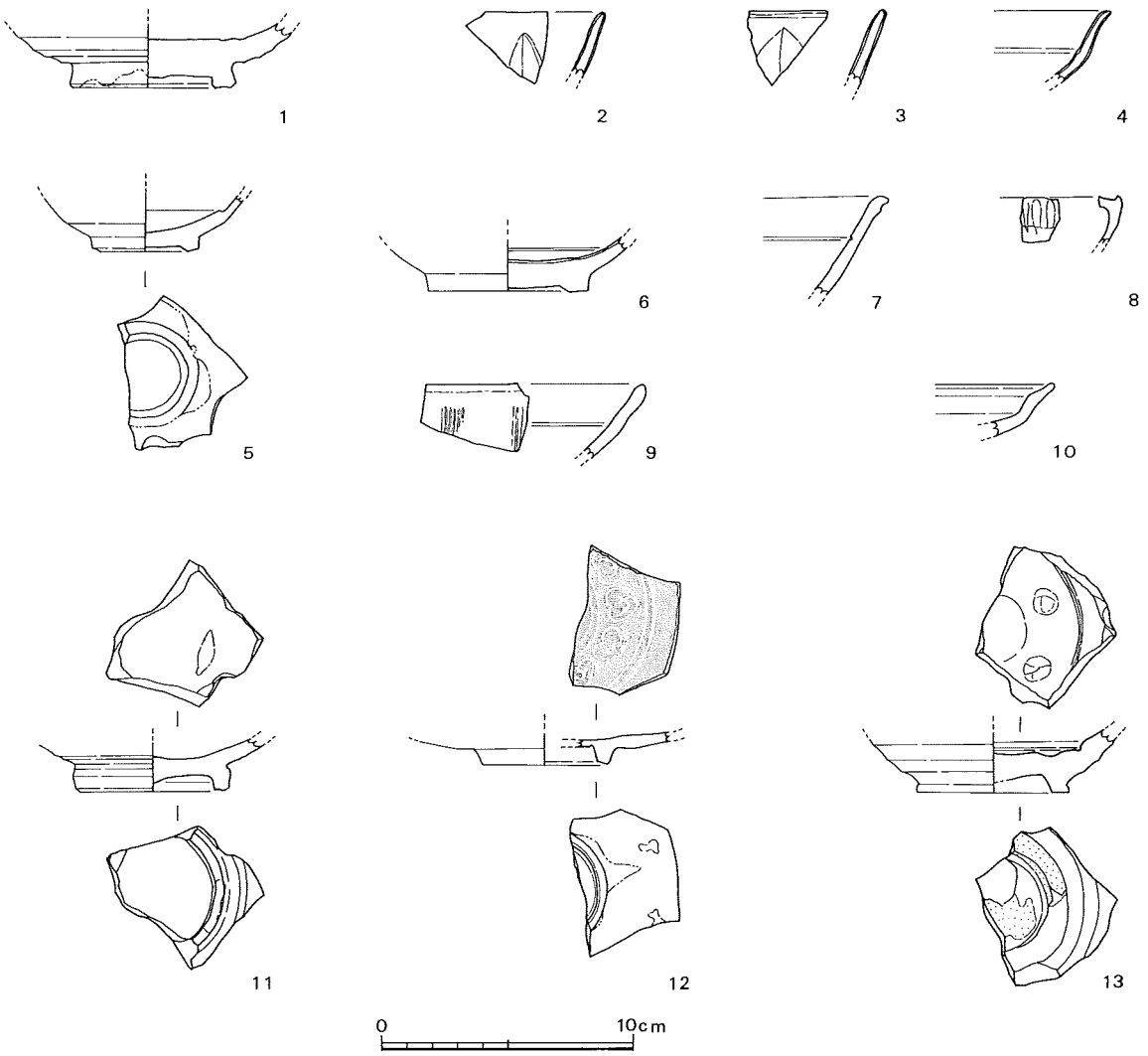


1層：暗褐色土層（中世期の包含層）
2層：明褐色混土層（明褐色,灰白色,
灰紫色等の粘質土の混土層）
3層：灰褐色粘質土層（グライ土壌）
4層：灰色粘質土層（　〃　）
5層：暗灰色粘質土層（　〃　）
6層：暗灰色混礫層



第2図　興触川上遺跡Ⅰ区遺物出土状況・土層図

白磁の口縁部片である。口縁部は外反しており，端部は水平で，体部内面上位に浅い沈線をもっているⅤ－４・ａ類の特徴を有す。Ⅰ区２層からの出土である。８は，青白磁製合子，蓋の受けの部分である。表採品である。９は，青磁の口縁部片で，内弯ぎみに外方に立ち上がるもので，口縁端部は露胎，外面には櫛目を有している。同安窯系青磁Ⅰ類の特徴を有するもので，表採品である。10は，唐津の皿の口縁部片である。Ⅰ区遺物集中１からの出土である。11は，青磁の底部片である。高台は逆台形をしており，内・外面ともに青磁釉をかける。見込みに白い目跡がついている。胎土はやや荒い。初期高麗青磁と思われる。Ⅰ区２層からの出土である。12も青磁の底部片で，底部の畳付およびその内側は露胎。象眼青磁で見込みに白土による円圏と宝珠様の文様がある。高麗青磁と思われる。Ⅰ区遺物集中１からの出土である。13は，うすい青白磁釉をかけた磁器の底部片である。底部は撥形を呈し外方に若干ひらく，見込みには内底の段をもち目跡はとれてえぐれている。畳付部およびその内側に細砂の付着がある。表採品である。



第３図　興触川上遺跡出土の陶磁器（１／３）

(4) ま と め

横田・森田氏の編年でいけば，本遺跡出土及び採集品である白磁のII類Ⅳ類Ⅴ類のものは，II期(11世紀中葉から12世紀初頭）のもので，青磁のⅠ－5類および同安窯系青磁はIII期（12世紀から14世紀中葉）におさまるという。11から13の朝鮮産陶磁器は13世紀末から14世紀そして李朝期の15世紀までの範囲のものかと考えられる。

今回の調査で部分的に遺物包含層を確認したものの，遺構等は確認できなかった。遺跡の継続期間としては11世紀中葉から15世紀，唐津の皿もあるところから16世紀末から17世紀始めのおおまかな期間が考えられる。しかし遺構の検出ができなかったことから遺跡の主体部とは考えられずその場所としては，調査地北側の標高が若干高くなる山裾になるのではないだろうか。

なお，II区の西側については，道路沿いの排水路を溝さらえするときに，表土かで岩盤を確認しており包含層はなかった。

引用文献

森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978

図　　版

Ⅰ区調査状況（東から）

同　　上

Ⅰ区調査状況

土層の状況　Ⅰ区の調査状況

図版 2

Ⅰ区調査後の状況

Ⅱ・Ⅲ区調査後の状況

報告書抄録

ふりがな	こうふれいせき　こうふれかわかみいせき
書名	興触遺跡・興触川上遺跡
副書名	一般県道郷ノ浦芦辺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	村川逸朗・杉原敦史・川口洋平
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL 09204(5)4080
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
興触遺跡（こうふれいせき）	長崎県壱岐郡芦辺町湯岳興触（ながさきけんいきぐんあしべちょうゆたけこうふれ）	42423	75	33°45′57″	129°44′07″	19950829 〜 19950911	50m²	県道拡幅
						19980706 〜 19980731	519m²	県道拡幅
興触川上遺跡（こうふれかわかみいせき）	長崎県壱岐郡芦辺町湯岳興触（ながさきけんいきぐんあしべちょうゆたけこうふれ）	42423	72-107	33°45′53″	129°43′53″	19981013 〜 19981021	202m²	県道拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
興触遺跡	遺物包含地	古代〜中世		土師器，須恵器 国産・貿易陶磁器	
興触川上遺跡	散布地	古代〜中世		土師器，須恵器 貿易陶磁器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第12集

興触遺跡・興触川上遺跡

1999．3．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷